

巨椋池の月見

——谷崎潤一郎「蘆刈」を読む——

辻 憲 男

Moon at Oguranoike — A Note on 'Ashikari' —

Norio TSUJI

【要 旨】 谷崎潤一郎の「蘆刈」（一九三二年）の読解。初めに、語り手の男が「お遊さん」の子ではないかとの疑いに対しては、これを否定した。次に、語りの方法と人物造型、また主題となる場面が巨椋池に設定され、ことさらに月見の夜が描かれた理由を、『源氏物語』以下の古典にさぐり、史実と地理に即して考証しつつ、私見を述べた。

【キーワード】 谷崎潤一郎、「蘆刈」、巨椋池、月見

と、さういつてそのをとこはしやべりくたびれたやうに言葉をとぎつて腰のあひだから煙草入れを出したので、いやおもしろいはなしをきかせていたゞいてありがたうぞんじます、それでああなたが少年のころお父上につれら

れて巨椋の池の別荘のまへをさまよつてあるかれたわけは合点がゆきました、ですがあなたはそのうちも毎年あそこへ月見に行かれると仰つしやつたやうでしたね、げんに今夜も行く途中だと云はれたやうにおぼえてゐますがといふと、左様でござります、今夜もこれから出かけるところでござります、いまでも十五夜の晩にその別荘のうらの方へまゐりまして生垣のあひだからのぞいてみますとお遊さんが琴をひいて腰元に舞ひをまはせてゐるのでござりますといふのである。

—

「を」とこのそのような話を聞いたのは、渡船の着いた洲の剣先の方の蘆の生えている汀のあたりだった。男はこれから向う岸の橋本から京阪電車に乗って巨椋の池へ月見に行くところだった。しばらく「わたし」と月見を楽しむふうだったが、男の實の心は四十何年かの昔、七つか八つの年に初めて父に連れて行かれた巨椋の池の月見の方にあった。それから毎年十五夜の晩に巨椋堤を歩いて池のほとりの邸の生垣から庭をのぞくのが、この男の定まった所行だとも言った。

男の父がいつ死んだのか明確には語られていない。お遊さんが「八十ぢかいとしより」ならば、五つ年上の父は生きていれば八十を越えている。しかし父にまつわる男の追憶は「やうく十ぐらゐ」までのことにとどまり、それ以後には及んでいない。「母は二三年まへに死去いたし」、七つ八つの男は父と二人きりで暮らしていた。「最初のとしに見ましたことゝその次々のとしに見ましたことゝがやゝこしくなつて」はいるが、男の記憶は少年時の三、四年程の間に限られている。父は「お前には此の秋の夜のかなしいことがわかるまいがいづれは分るときがくるぞ」とも、「子供にこんなことをいつてきかせても分るまいけれどもいまにお前も成人するときがくるのだからよく己のいつた

ことをおぼえてゐてそのときになつておもひ出してみてくれ」とも言った。その時の父は今の男よりもやや若く、四十過ぎであつたろう。父はそれから何年か後に死んだのに違いない。成人した男を見届けたというふしはない。父は男の少年時の記憶の中にのみ生きている。そのように小説は設定されている。

一方、男の叔母によれば「お遊さんは十六七の時から四十六七になりますまで少しも輪廓に変わりがなくていつみても娘々したうひくしいかほをしてゐた人だ」という。幼な友達の叔母のこの言は、若くても五十歳を過ぎてからの述懐であろう。お遊さんが今も生きているのかどうか、小説は謎のままうち置かれるが、その容貌を男が写真によつて説明することからすれば、すでに世を去っているのではないか。否、もっと大胆に言えば四十六七というのがその享年ではあるまいか。少なくとも男の話の中ではお遊さんは四十六七止まりであつて、八十近い老人などではあり得ない。父と相前後して亡くなったのだらう。「叔母なども始終さう申してをりました」とあるから叔母も故人である。即ち男の話の中の人物はみな過去の人である。さればこそ男は「わたくしもまた此の月を見まして過ぎ去つた世のまぼろしをゑがいてゐたのでござりますとしみぐとさういふのである」。

男の言う「まぼろし」は、「わたし」の追つていた中世の「江口の君のやうな遊女ども」の「まぼろし」と同じではない。しかしお遊さんも月見の宴の別荘も、現存しないという意味では同じ幻である。「いまでも十五夜の晩にその別荘のうらの方へまゐりまして生垣のあひだからのぞいてみますとお遊さんが琴をひいて腰元に舞ひをまはせてゐるのでござります」とは男の幻想（または願望）でしかなく、「をかしなことをいふとおもつた「わたし」は、気がつけば「たゞそよくと風が草の葉をわたるばかり」の中洲にひとり取り残されていた。男の思念は、現実の中洲にいる聞き手の側にはない。

仮にお遊さんが四十六七で亡くなつたとすれば、それは三十年程前のことになる。男はほぼ成人し、男女の仲というものも、お遊さんに寄せた父の思いも了解できる年頃になつていた。「父はその、お遊さんのぼうつとした、いは

ゆる『蘭たけた』ところに一と眼でこゝろをひかれたのでござりまして父の趣味をあたまにおいてお遊さんの写真を
見ますとなるほどこれなら父が好いたであらうといふことが分つてまゐるのでござります」との理解も、その年齢の
ものとしてふさわしい。またお遊さんの長襦袢を父から見せられたのは十ぐらいの時だったが、「父はわたくしを子
供とみとめずにはなしたのでござります、さればそのときはもちろん理解いたしませなんだが言葉どほりに記憶いた
してをりましてふんべつがつきますにしたがつてだんくとその意味を解いてまゐつたのでござります」と言う。
「もうよほど成人してをられたのでせうね」との疑いを生じたほど、それは「少年のあたま」に刻印されていた。父
もお遊さんも男の少年時にのみ固着している。聞き手を欺こうとしてではなく、男の時計は現在に生きていないので
ある。

これは男自身も過去の幻と現在とを区別していないということだろう。「まいねんわたくしは巨椋の池へ月見にま
ゐるのでござります」とは言うが、今もそこに少年の日に見た光景があるのではない。そもそも男の影も最後には
「いつのまにか月のひかりに溶け入るやうにきえてしまった」のだから、男もその光景もみな非現実なのだと言うこ
ともできよう。しかし小説の枠組みは所与のものとしなければならぬ。男の語りは現に長々と続いた。正体が亡霊
であろうとなかろうと、父とお遊さんの交渉はありし世の実話として読者に提示される。たとえ非現実の話であつて
も確かな現実感を持つ。

それ故、男にはお遊さんの姿が朧げにしか見えていない。四十何年の昔も「座敷のありさまも毎年たいがい同じや
うでござりまして」とは言うが、

しかしその人は座敷のいちばん奥の方にすわつてをりまして生憎とすゝきや萩のいけてあるかげのところに兎が
かくれてをりますのでわたくしどもの方からはその人柄が見えにくいのでござりました、父はどうかしてもつと
よく見ようとしてゐるらしく生垣に沿うてうろくしながら場所をあつちこつち取りかへたりしましたけれども

どうしても生け花が邪魔になるやうな位置にあるのでござります、

とあるように、男はお遊さんの顔をはっきり見たことがないのである。この光景も少年時の記憶の中にのみ閉じ込められている。はたして男が十歳を過ぎても巨椋堤を歩いたとは思われない。やがて父が死んで、もしなお男が一人で別荘をのぞき見に行ったとすれば、それは何のためだろうか。お遊さんへの父の愛執が子をも駆り立てたのだろうか。父がしたと同じように、(亡魂のために?) 心寄せのお遊さんを見に通ったのだろうか。あるいはお遊さんに亡き母の面影を求めたのだろうか。

否である。お遊さんへの男自身の執着はほとんど語られない。男においては父を通してしかお遊さんは現われない。男にとっては「直接経験」的な対象ではない。

再縁後のお遊さんは、父にとっても邸の生垣の間からのぞき見るだけの手の届かぬ遠い存在になっていた。ひとたび「だからあなたはその巨椋の池の御殿とやらへ行つてきらびやかな襖や屏風のおくふかいあたりに住んでください、あなたがさうしてくらしていらつしやるとおもへばわたしはいつしよに死ぬよりもたのしいのです」と告げ、お遊さんも納得してきっぱり別れたからには、父はもはや直接の対面を望まない。そうしてその後お静と契りを結び男が生まれた。ところが五年後にお静は亡くなり、その忌みも明けた頃から年に一度の父の月見行が始まるのである。すでに彼方の世界の人であることは、子に長襦袢を見せて「あゝあのからだがよく此の目方に堪へられたものだといひながらあだかもその人を抱きかゝへてゐるやうに頬をすりよせる」という場面にも顕著である。父にとってもお遊さんは「非現在」の人になつてゐた。

お遊さんは終生父が結婚することの叶わぬ別世界の人であつた。出会つた時は若後家の身で幼子があり、婚家も再縁を許すふうはなかつた。致し方なくお静と一緒になつたが夫婦の交わりはなく、三人だけの秘密の間柄が続いた。三四年後子が死んでお遊さんは離籍し、やがて再縁話がまとまつた。父は心中までも思いつめたが、お遊さんをあえ

て遠ざけて交際を断った。「あなたは私のやうな者を笑つてすてゝしまふほど鷹揚にうまれついた人です」。あやにくな巡り合わせで「その時分からだんくびろく」し「おちぶれ」て再び対面することもなかったのである。

二

それにしても、かつて父は子になぜ「お遊さまのことをわすれずにゐておくれよ、己がかうして毎年おまへをつれてくるのはあのお方の様子をお前におぼえておいてもらひたいからだ」と涙ぐんだ声で言ったのか。なぜ子にそう教え込む必要があったのか。

ここに自ずと、男が実はお遊さんの生んだ子だったのではないかという疑念が生じる。男はこと改めて、しかし、わたくし、こゝでおいっさんのためにも父のためにもべんめいいたしておかなければなりませぬのはそこまですゝんできてゐながらどちらも最後のものまではゆるさんだのでござりました。それもまあ、もうさうなつたらさういふことがあつてもなうても同じことだと申せませうしないにいたしましたところがなんのいひわけになりはいたしませぬけれどもわたくしは父の申しますことを信じたのでござります。父がおしづに申しましたのにはいまさらになつてそなたにすむもすまないやうなものだがたとひまくらを並べてねても守るところだけは守つてゐるといふことを己は神仏にかけてちかふ、

云々と父の覚悟の堅固だったことを語っている。ただしお静からして、二人が「ものゝはずみ」で「ひよんな間違ひでもしでかしますのを祈つてゐるやうにもみえた」ぐらいだから、眞実はどうだったか。男も「又まんいちにも子供ができたらいふしんぱいなぞが手つだつてゐたかと思はれるのでござります」と推測する一方、「けれども貞操といふものはひろくもせまくも取りやうでござりますからそれならといつてお遊さんがけがされてをらなんだとは申

せないかもしれませぬ」と甚だ曖昧なことを言う。「それについておもひ出します」のが長襦袢の一件で、父は「このざんぐりしたしぼの上からをんなのからだに触れるときに肌のやはらかさがかへつてかんじられるのだ」「お遊さんといふ人は手足がきやしやに生まれついてゐたが此の重いちりめんを着るとひとしほきやしやなことがわかった」と言った。その実感が事実だとすれば情交が決してなかったとは言えない。「ではうかゞひますけれどもお遊さんとお父上とのくわんけいが仰つしやるとほりであつたとするとあなたは誰の子なのです」。

ところが男が生まれたのは、お遊さんが伏見へ再縁した後である。男がもしお遊さんの生んだ子ならば、幼子の「一」が病死した前後から輿入れするまでの間に身ごもつたらしい形跡がなければならぬが、それは書かれていない。父が心中まで思い悩んだ時にも子についての心配はなかった。心中を實行できなかったのはお静がいたことと、それにもまして「お遊さんをいたはる氣もち」が働いたからだった。「おしづもそれを何よりもおそれてゐたらしくござりましてきつと一緒につれて行つてくださりませ、いまになつて除けものにされたらなんぼうくやさしいかわかりませぬといつてあとにも先にもおしづがやきもちがましいことを申ししたのは此のときだけださうにござります」。もしお腹に子がいれば別れ話はこう簡単には済まなかつたろう。「お遊さんは父のことばをだまつてきいてをりましてぼたりと一としづくの涙をおとしましたけれどもすぐ晴れやかな顔をあげてそれもさうだとおもひますからあんなのいふ通りにしませうといひましたきりべつに悪びれた様子もなければわざとらしい言訳などもいたしませなんだ」。このあたりの男の語りに不明瞭さは感じられない。

父はお遊さんと別れる道を選んだ。その重大な岐路での選択が三人の物語に結着をつけた。かつてお静は婚礼の晩に「わたしは一生涯うはべだけの妻で結構ですから姉さんを仕合はせにして上げて下さい」と言つて泣いた。父の方にも「お遊さんに対してどこまでも純なあこがれを持ちつゞけたい、一生お遊さんといふものをひそかに心の妻としておきたいといふやうな意地」があり、「あの人をきやうだいとばかりおもふやうにしてゐるのだし、そなたがなん

としてくれたところでさう思ふよりどうもなりやうはない」と言った。そういう両者の気持ちがあ致したのである。その後万一お遊さんが身ごもったならば、どちらの意志にも背くことになり、「心の妻」でもなくなる。お遊さんと一滴の涙で承知しようはずもない。

さらに立ち入った推測を付け加えるなら、右の長襦袢の件りは慎之助の強い自制（慎しみ）を語ったものと考えた。お遊さんの着物は、抑え難かった情動の昇華としてある。おそらく別れの時に形見の品として貰ったものだろう。それは「伽羅の香とお遊さんが自筆で書いた箱がきのある桐のはこ」に「冬の小袖ひとそろへ」を入れて、その下に畳んであった。小袖の下の「肌身につけてゐた」長襦袢の意味は、父がそれ以上にはお遊さんの身体に近づき得なかったということに他ならない。父にとってお遊さんは即ちそのような正身を包む余香でとらえるしかない存在だったのである。

すべては父が男に話したことだから、虚偽が混じっていたとしても真実は確かめようがない。しかし書かれている限り、男がお遊さんの子でないことは明白である。⁽¹⁾

作品の理解に作家の私生活を引照することは慎重を要する。が、この時の作者の心底には「お遊さんは子供を生んではならない」という規制が潜在していたのではないか。「蘆刈」は周知のように、作者自身が執筆中に「御寮人様のやうな御方を頭に入れて書いてゐる」（昭和七年十一月八日松子宛手紙）と告白し、後年「明瞭に彼女を頭の中に置いて書いた」（『雪後庵夜話』）と認めた小説である。谷崎には「芸術家は絶えず自分の憧憬する、自分より遙に上にある女性を夢見てゐるものでござりますのに、細君にしますと、大概な女性は箔が剥げ良人以下の平凡な女になつてしまひます」、それ故「一生身命を捧げて奉仕致すに足るやうな貴き方を得て、その御方の支配に任せ、法律上は夫婦でも実際は主従の関係を結ぶことだ」（同じ頃の手紙）との考えがあった。作中のお遊さんはそのような女性に近いのではないか。私生活というのは、夫人と「妻と云ふよりは幾分か他人行儀の、互に多少の間隙を置いた附き合

ひ」を望んだことで、後年、懐妊した時のことを「M子と私に実際の血縁のつながりが出来れば、もはや私たちの間の間隙、幾分の他人行儀、根津時代からの陰翳、と云ふものがなくなる」「私は、私の子の母と云ふものになつたM子を考へると、彼女の周圍に揺曳してゐた詩や夢が名残りなく消え去つてしまふのを感じた」「私はときどき、M子が私の子を生んでゐた場合の葛藤を想像して怖氣を震ふ」等と回想した（『雪後庵夜話』）。「蘆刈」執筆當時も「総ての手續が終了する迄、私たちは寄り添うことはあつてもまことの契は交さなかつた。谷崎と云う人は彼様な律儀なところのある人であつた」という（『倚松庵の夢』）。まさにお遊さんもまた不可犯の女性だつたのだ。

男は母のことをほとんど語らない。父から見た、

おしづさんも美人でないことはない、お遊さんとは顔だちが違つてゐたのでござりますけれどもやはりきやうだいでござりますから何処かにお遊さんをしのばせるやうなところはある、しかし何よりも不満なのはお遊さんの兒にあるあの「蘭たけた感じ」がない、お遊さんよりずっと位が劣つて見える、おしづさんだけを見てゐればさうでもござりませぬけれどもお遊さんとならばましたらお姫さまと腰元ほどのちがひがある、

という容貌のこと、姉の「仕合はせ」のため「一生涯うはべだけの妻」でよい、「姉さんのやうにしようとかく福運のそなはつた人がどうにもならない世の中なら私などはものゝかずでもござりませぬ」と自己限定した覚悟のこと、「うちきな女といふものは黙つてゐながら氣がまはるもの」で、

さういふ風におしづはとかく粹をきかせて先ばしりをするくせがあるのでござりまして元來が苦勞性なのでござりませうか若い時分から取りもちの上手な老妓のやうなところがあつたのでござりますが考へてみればお遊さんに身も心もさゝげるために生れて來たやうな女でござりまして

「云々の影法師のような役割が語られるばかりである。お遊さんには「ありあまる福があり徳がある」が、お静にはそ

れがない。再縁後のお遊さんは「金にあかしたくらし」をしたが、お静はつつましくひっそりと世を去った。明るい月の光の届かない「ろうじのおくの長屋」であった。お静は、仕合わせになるお遊さんの身代わり（形代）だった。お遊さんとの心の契りを断ち切って、父はお静と夫婦になった。お遊さんが「生まぬ女」である以上、お静が代わりに「生む女」でなければならなかった。ただその経緯を作者が「ながいあひだの苦勞をおもひ」「いひしれぬあはれをもよほし」といった程度の説明で済ませているのは、簡略に過ぎて物足りない。お遊さんが去って後のことは、もはや自然の成り行きに従うほかなかった——それはそうだろうが、父の心はなおお静にはなく、お静の生んだ子（男）にまで「お遊さまのことをわすれずにゐておくれよ」と強いたのだ。子も実母を慕うかのようにお遊さんのことを語った。

男の語りの最後の段、「そんなしだいでお遊さんはまもなく伏見へさいえんいたしました」以下は、僅か八百字、小説全体の五十分の一程度である。先の「誰の子なのです」の問いに対する「左様々々、その母と申しますのはおしづのことでござりましてわたくしはおしづの生んだ子なのでござります」という答えは、わざと延引した種明かしである。氣を持たせながら最後にごまかしたようでもある。意外な結びに読者も何か腑に落ちない感じを抱く。急転直下語りが終わり、「でも、うお遊さんは八十ぢかいとしよりではないでせうかとたづねたのであるが」、男はそれには答えずに「きえてしまった」。

だが昔語りの中の年立てはさほど重要な問題ではない。語りの世界の「本当らしさ」が完結すれば、それを現在に照合する必要もない。お遊さんの年齢が年立てからはみ出しているのは、幻影だから当然だとも言えよう。「をかしなこと」だから男の語りは非現実なのである。非現在のお遊さんを鮮やかに彷彿させるために、お静は遠景の影でなければならぬ。父もお静も故人であるが、お遊さんは「故人」であってはならない。男は今もお遊さんを「わすれずにゐて」語りの中に現出させなければならなかった。

最初「わたし」は水無瀬の宮を訪ね、「ちやうどその日は十五夜にあたつてゐたのでかへりに淀川べりの月を見るのも一興である」と考えた。洲の剣先にうづくまって月を眺めると、「人間のいとなみのあとかたもなく消えてしまふ果敢なさをあはれみ過ぎ去つた花やかな世をあこがれる心地がつる」。空想は後鳥羽院から江口の遊女へ延び、「此の月に対してわたしの眼前にはうふつと現れてくるものは何よりもその女どものまぼろしなのです」へと移る。そうして「過去の逸樂の思ひ出」や「往時をしたふ心持」が話題になり、男の語りが導き出される。

「蘆刈」の題はいわゆる蘆刈説話を踏まえる。しかし貴族の奥方になった女が蘆売りにおちぶれた男と再会する『大和物語』の話は、境遇は似ているが小説の筋立てには直接関係しない。また結末は夢幻能の構成を思わせるというが、現在能である「蘆刈」は再会した夫婦が連れ立って京に上るというめでたい曲である。冒頭の「君なくてあしかりけりと思ふにもいと難波のうらはすみうき」の古歌は慎之助（父）の心境には適當するが、江口の遊女や月見の趣向からは離れてしまっている。

確かに謡曲「蘆刈」の道行きの「淀舟や、美豆野の原の曙に、影も残りて有明の、山もと霞む水無瀬川」の一節は小説の所柄に一致する。謡曲「江口」の「月は昔の友ならば」「月澄みわたる川水に、遊女の歌ふ舟遊び、月に見えたる不思議さよ」「秋の水漲り落ちて去る舟の、月も影さす棹の歌」なども作者の葉籠中にあった文句だろう。もっと直接的には『澱川兩岸一覽』の橋本の図のとおり、男山の空にかかる月を船中から眺めるといふ趣向があった。さらに「小督」や「琵琶行」は、十五夜あるいは水辺の音曲に男女離別の悲哀の主題をこめた先行文学である。殊に「琵琶行」が、秋の月夜の潯陽江頭に、元は妓女であった女から身の上話を聞くという設定であることは注意されよ

う。

これらは男の語りを導く伏線として有効な枠組みであるには違いない。しかし「語り」の方法の尤なる淵源は何よりも王朝の「作り物語」である。中心主題のお遊さんを最も明るく照らし出すのは巨椋の池の別荘の月見の場面である。その下敷きは『源氏物語』の「橋姫」である。男の語りの「とある大家の別荘のやうな邸のまへを通りましたら琴や三味線や胡弓のおとが奥ぶかい木々のあひだから洩れてまるるのでござりました」「だんく琴や三味線のねいろがはつきりときこえてまゐりほのかな人声などもいたしまして奥庭の方へ近づいてゐることが分るのでござりました」「父は生垣のすこしまばらになつてゐる隙間から中をのぞいてどういふわけか身うごきもせず(2)にそのまゝそこをはなれないものでござりますから」云々の叙述は、宇治の姫君を薫が垣間見る場面と非常によく似ている。それを『潤一郎訳源氏物語』(巻十七、昭和十五年)の訳文から摘記すれば、

だんく近づいていらつしやると、はつきりそれとも聞き分けられないやうな物の音が、妙に凄くひびいて来るので、……暫く物蔭に忍びながら聞いてゐたいと思ふのだが、……お居間の方へ通つてゐるらしい透垣の戸を、少し押し開けて御覧になると、月の面にほんのり霧がかゝつてゐるけしきを眺めながら、簾を短く捲き上げて、人々が控へてゐるのであるが、……内においでになるお方のお一人は、柱に少し隠れていらつしやりながら、琵琶を前に置いて、撥を手まさぐりしておいでになる。と、月が俄に雲間を洩れて、明るい影がさして来たので、「扇でなくて、此れでも月を招き寄せることが出来るのですね」と仰つしやりながら、空を仰いでおいでになる目鼻立ちの愛らしさ。細かいところまでは見定め難いけれども、さぞつやゝかな、お綺麗なお顔をしていらつしやるのであらう。その傍に物に凭り添うていらつしやる今一人のお人は、琴の上へ打ち俯すやうになさりながら、「入る日と呼び返す撥と云ふことは聞いてゐますが、月をお招き寄せになるとは、変つたお思ひつきですね」と仰せになつて、笑つていらつしやる御様子(1)が、これは今少し仔細ありげに、床しうお見えになるのであるが、……

この時季は「秋の末つかた」「有明の月のまだ夜深くさし出づるほど」(旧曆九月下旬)の、十五夜ならぬ「後の月見」であるが、小説には、

琴をひいてゐるのは上座の方にある女の人で三味線は嶋田に結った腰元風の女中がひいてをりました、それから
檢校か遊芸の師匠らしい男がゐてそれが胡弓をひいてをります、わたくしどもの覗いてをりますところからはそ
の人たちの様子はしかとわかりかねましたけれどもちやうどこちから正面のところ金屏風がかこつてありま
してやはり嶋田に結った若い女中がそのまへに立つて舞ひ扇をひらくさせながら舞つてをりますのが顔だちま
では見えませぬけれどもしぐさはよく見えるのでござります、

とあつて楽器や道具立てが似通っている。偶然の一致とは思えない。ただ会話の主は琴をひく女主人(御寮人)一人であるから、

髪のかつかう、化粧の濃さ、着物の色あひなどから判じてまだそれほどの年の人とは思はれないのでござりました、殊にその声のかんじが若うござりました、だいぶん隔たつてをりましたから何を話してゐるのやら意味はきゝ
取れませなんだがその人のこゑばかりがきはだつてよく徹りまして、「さうかいなあ」とか「さうでつしやろな
あ」とか大阪言葉でいつてゐる語尾だけが庭の方へこだましてまゐりますので、はんなりとした、余情に富んだ、
それでゐてりんくくとひゞきわたるやうなこゑでござりました、そしていくらか酔つてゐるとみえましてあひま
くにくろくと笑ひますのが花やかなうちに品があつて無邪氣にきこえます、

と、内容には入らず声のゆかしさだけが述べられる。『源氏物語』では大君が琴をひき、中君が琵琶をひく。お遊さんは「蘭たけた」「品のよい上臈型の人」であり、お静は「何処かにお遊さんをしのばせるやうなところはある」が「蘭たけた感じ」がなく、「お遊さんよりずっと位が劣つて見え」「お姫さまと腰元ほどのちがひがある」。三味線をひく腰元風の女中はさながら「腰元のやうに世話をやく」かつてのお静であり、また琵琶をひく中君でもある。宇治の

姉妹は、原文に中君が「いみじくらうたげににほひやか」、大君が「いますこし重りかによしづきたり」とあり、お遊さんほど際立たないが姉がまさっていた。薫はその大君に魅かれ、死なれた後は中君に迫り、さらに形代の浮舟を求めたが、大君を忘れることはなかった。大君をお遊さんとすれば、薫の位置に慎之助がいる。大君に対して慎しみ深く誠実な薫と、お遊さんとの一線を越えなかった律義な慎之助とが重なる。また落魄した宇治八の宮と姫君たち（北の方は亡い）と、やがて実家が微禄する小曾部の姉妹（母親がいない）とが相似する。

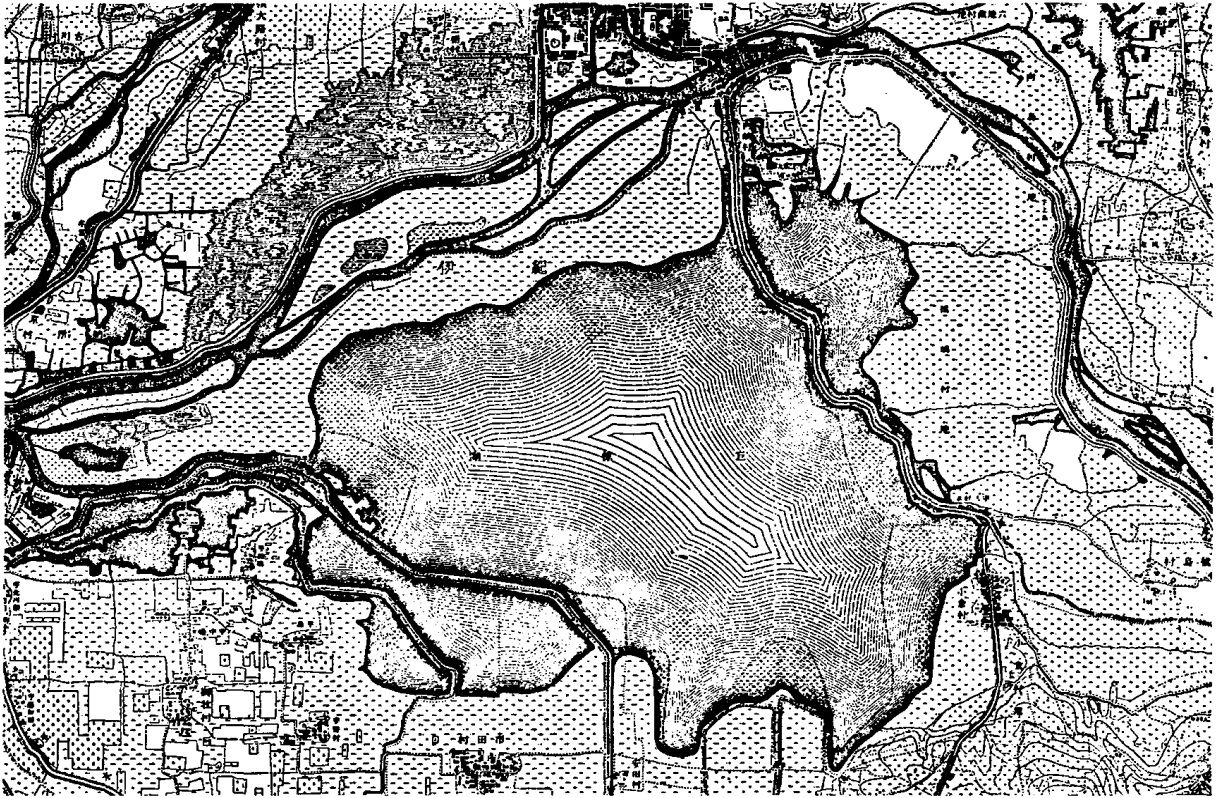
『源氏物語』では宇治の山荘は「網代のけはひ近く耳かしがましき川のわたり」にあり、漠然と「川のこなた」（右岸）の宇治上神社付近が想定されていた。山荘の「西面」から薫は「いかゞはしい舟に柴を積んで、それぐの営みに追はれながら、川の面を往き交ふ者共を御覧になる」とある（同上潤一郎訳）。宇治川が宇治橋のすぐ川下で巨椋池に流入していた古代では、山荘から見渡す景観も池の周辺の風景と大差がなかっただろう。その河口の右岸側の中島が槇島であり、お遊さんの別荘もその付近に設定されたのである。「芝生や築山のあるたいそうな庭に泉水がたゞへてありまして、その水の上へむかしの泉殿のやうなふうに床を高くつくつて欄杆をめぐらした座敷がつき出てをりまして」「泉水のおもてには月があかるく照つてゐまして汀に一艘の舟がつないでありましたのは多分その泉水は巨椋の池の水をみちびいたものでこゝからすぐに池の方へ舟で出られるやうになつてゐるのでござりませう」。作者は冒頭に『増鏡』巻一の「おどろのした」の文章を引き、後鳥羽院が水無瀬殿の釣殿の勾欄の下に船を寄せて様々の宴遊を催されたさまを追懷して、「管絃の余韻、泉水のせゝらぎ、果ては月卿雲客のほがらかな歎語のこゑまで」を幻に描いた。その場所がそっくり巨椋池の水辺に移ったのである。

言うまでもなく宇治は平安・鎌倉期の貴顕の別荘地であった。『増鏡』巻五の「内野の雪」には宝治二年（一二四八）十月に後嵯峨院の宇治御幸があり、槇の島や橋の小島、平等院に紅葉を見物したことが記されている。⁽³⁾ 槇島には室町期に城が築かれ、同じく作者が引いた『信長記』の中には、天正元年（一五七三）將軍足利義昭が槇島昭光を頼っ

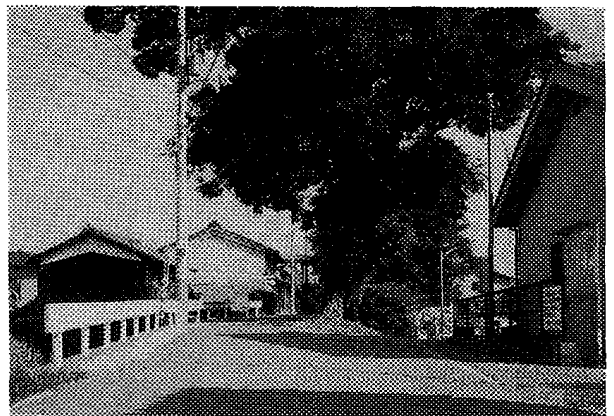
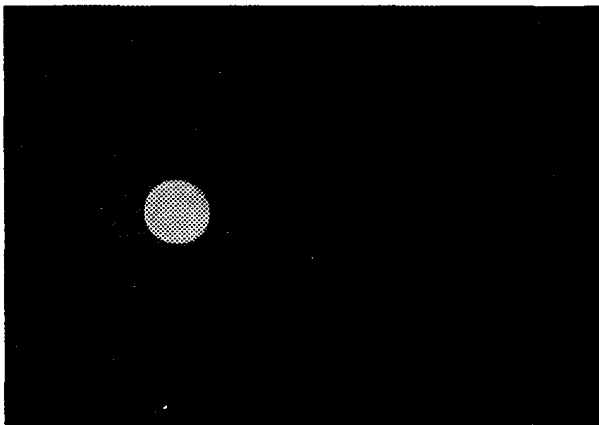
て槇島城に拠ったが、信長に攻められて敗走し、幕府が滅亡したという有名な記事もある。これらを作者が読まなかったはずはない。

同じく伏見は離宮が営まれた観月の名所であった。早く『平家物語』巻五「月見」に名が見え、『増鏡』巻十以下にも伏見殿御幸が散見するが、中世以降とりわけ有名なのは文禄・慶長年間の秀吉の伏見城である。『宇治川両岸一覽』や『京都府紀伊郡誌』（大正四年）には指月の森、指月庵址、月橋院、月見池、月見岡等の名所が見える。また「蘆刈」の前年の「盲目物語」奥書に見える『甫庵太閤記』の巻十六には、「抑も伏見の境地は、南は宇治川、心のゆく所に流れつゝ着船の便よし」「平等院、扇の芝、塔の嶋、山吹の瀬、宇治おちかた、宇治の蔵松、真木の釣月、伏見の指月、其の景いづれかましおとりせる」などである。この一節は後の「聞書抄 第二盲目物語」（昭和十年）にも抄出口訳された（その五）。秀吉は指月の森に隠居所を作り、月見矢倉を築き、観月の宴を催した。⁽⁴⁾向島に出城を作って徳川家康を住まわせ、伏見から小倉に至る巨椋堤（太閤堤）を築いた。作者がこれらの史実を踏まえていることは疑いない。

お遊さんの別荘は伏見から「片道一里半か二里」の巨椋堤の上にあった。明治二十年代、堤防上には槇島村西目川と三軒家の二集落があったが、実際は西目川では近すぎ（約半里。いま宇治市槇島町内。近鉄向島駅南東）、その南方の三軒家でもまだ近い——大正七年の「旧都巡遊記稿」（新撰京都叢書第四巻）によれば巨椋堤は観月橋から巨椋神社まで大約四十町とある（一里は三十六町、三九二七m）。巨椋神社は三軒家のさらに南の小倉村内である。それ故、もし別荘を地図上に求めれば巨椋堤を出外れることになり、あえて槇島村内に求めるならば、三軒家から藺場堤を東行した村の東南部の地点あたりが距離的に適合する。そこは宇治橋に程近く、よく知られた月見の名所、真木の釣月庵の故地でもある。『宇治川両岸一覽』には「この地は四面渺々として東に宇治川、西に巨椋の江あり。これゆゑに月を愛するに無双の勝地なり。古人この地を賞して釣月と号く。伏見の指月・槇島の釣月みな佳境として一双の

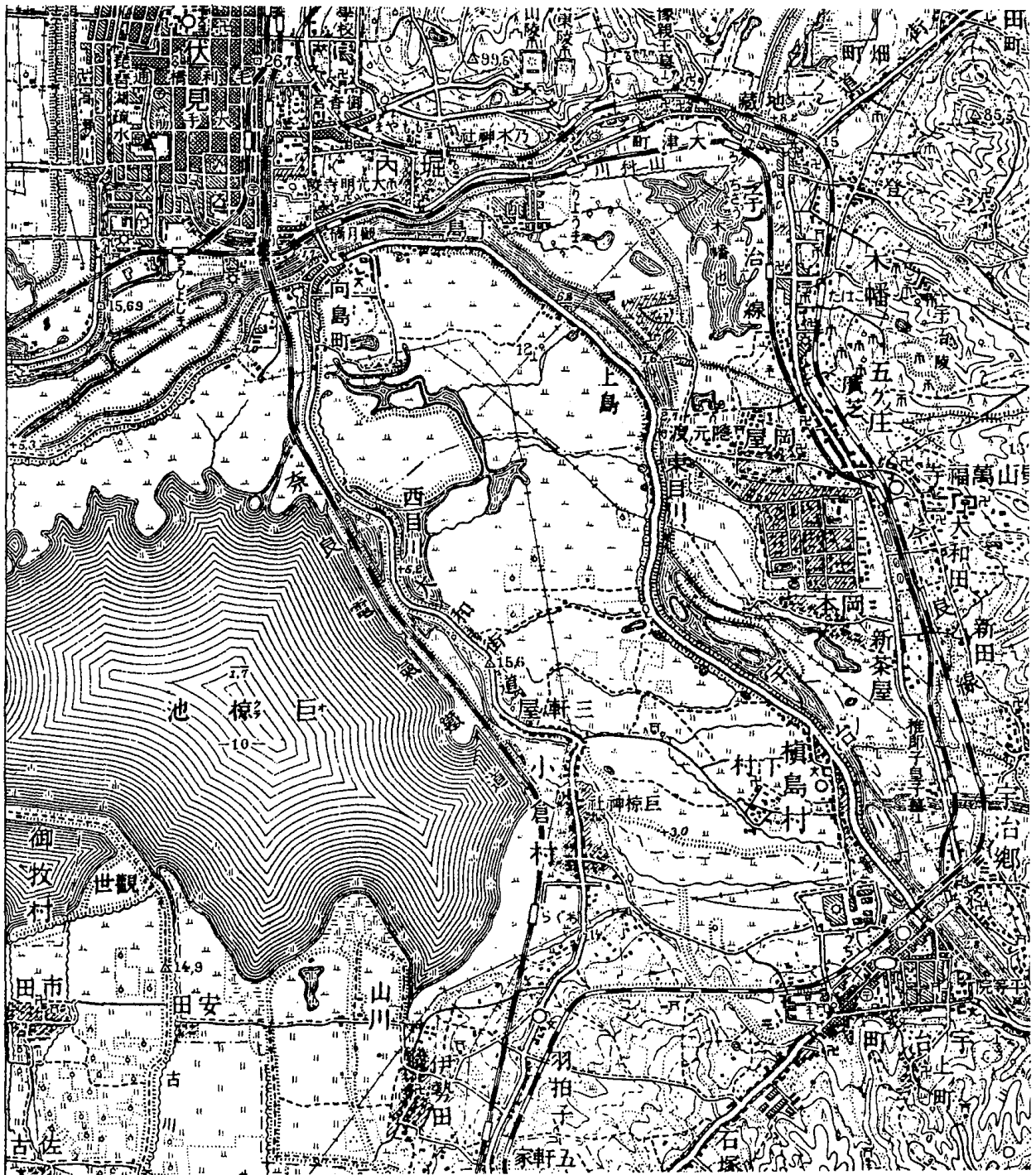


明治二十一～二十三年の巨椋池。蛇行した堤の中程に西目川、南端に三軒家の集落がある。『日本地誌 第十四巻 京都府・兵庫県』1973年の図版を、約75%に縮小した。



右、旧小倉堤の上の集落、西目川。

左、西目川の東方に昇る月。1998年9月7日撮影。前日6日の満月は曇天のため見えなかった。



昭和七年発行の五万分の一地形図「京都東南部」より。

地なり」とある⁽⁵⁾。しかし明治期にはすでに池の汀線からかなり離れていて、「ひろぐ」とした池のあるところ」ではない。つまり小説は現実と合わない。もっとも子供の時の「一里半か二里」「二里も三里も」という距離感を実際よりも遠く感じられたろうし、元より虚構の中の場所を地図上に特定するなどは無用のことかもしれない。ただ推測を記すならば、作者は西目川か三軒家あたりの水郷の家並みを頭に置いて別荘の立地を考えたのではあるまいか。昭和初期の地形図を見ると、これらの堤防集落の周囲には池水の名残りがいまだ存している。明治二十年代初めの地形図では西目川の北東側にさらに大きな池水（二ノ丸池）が広がっている。谷崎は「蘆刈」と同時期に執筆した「青春物語」に、明治四十五年五月、磯田多佳女らと俤を連ねて「巨椋堤や槇島のあたりを通つて宇治へ出かけた」日のことを回想し、「巨椋の池の水がどんよりと生温く光つて、日がチカチカと照り返す土手の路を、私は揉み上げから襟の周りへじつとり油汗を掻きながら揺られて行つた」と書いた（京阪流連時代のこと）。後年も「昔私はあの辺の風光を非常に愛していた」「私が最初にあの辺の風光に惹かれたのはまだ巨椋池が埋められていない頃であつた」となつかしがった（『越前竹人形』を読む「昭和三十八年」）。「蘆刈」が書かれたのは昭和七年、この広大な巨椋池の干拓事業が緒につく直前のことである。庭や泉殿のある別荘どころか、現実上も、池水に月のうつるのを見ることが早晩失われる。若々しいお遊さんばかりでなく、渺々たる巨椋池の自然景観もまた「まぼろし」に化すべき時だつた。

男が父に連れられて月見に出かけたのは明治二十年代前半のことと思われる⁽⁶⁾。「明るいうちから家を出ましてまだ電車のない時分でござりましたから八軒屋から蒸汽船に乗つて此の川すぢをさかのぼつたことをおぼえてをります」。淀川の上り船は伏見まで八時間もかかつた。夜間も航行したが、次第に陸上輸送におされて衰退した。左岸の京阪電車が開通したのは明治四十三年である。もっとも東海道線の京阪間は明治十年に開通していたからそれで行く方がずっと早かつた。しかし物語の演出のためには鉄道ではなく淀川を水行するという設定が必要だつた。淀川にはもう遊女舟も蒸汽船もなく、水無瀬の渡船さえいまどき「古風な交通機関」になっていた。昭和三年には巨椋堤上に鉄道（旧

奈良電鉄）が敷設された。「わたし」の乗って来た新京阪線も同じ年に開通したばかりだった。同年十一月の即位大典に間に合わせるため、この頃は鉄道建設のラッシュ期であった。男の追憶談はそのような鉄道網が延びる以前の、江口の遊女の昔と変わらぬ水辺の昔物語でなければならなかった。⁽⁷⁾

四

谷崎は単行本『盲目物語』の「はしがき」に、作者の「国史国文趣味」は早く『栄花物語』に材を取った処女作「誕生」を始めとし、所収の「盲目物語」や「吉野葛」などをさして「作者は今後とかう云ふものを書くかも知れないが」と記した。これに続く「蘆刈」では、明治十年頃の女主人公が、奥深い雲上の女房かお局さまのような蘭たけた品のよい上臈型の「大家の御寮人」として造型された。お遊さんの遊興は中世の水無瀬殿の釣殿の宴遊や、江口の遊女の遊芸に通じ、その「芸人や腰元をあつめて月見の宴を催しながら興じ」る花やかな姿は国史国文の中の年中行事の再現であった。

旧暦八月十五夜の月見と言えば、『源氏物語』『須磨』の「心づくしの秋風に」の一節や、『栄花物語』巻一の康保三年（九六六）の月の宴などがよく知られる。この時には必ず詩歌管弦の遊びが催されたが、また『竹取物語』のかぐや姫の昇天や『夜の寝覚』巻一の琵琶の秘曲伝授のように、音楽とともに天人降下が現出するという例もあった。名月を賞でる夜のあやしい雰囲気がこの世ならぬ世界の幻想を呼ぶのである。澄明な月光と楽の音とともに月世界の天女のような女人が現われる。お遊さんも天人のようにいつまでも若く年をとらず、また人間界の男（慎之助）と結婚することなく、遠い別世界へ去って行った。慎之助とお静はかぐや姫に傳く竹取の翁と嫗のようでもある。

慎之助が毎年一夜限り十五夜の晩にお遊さんを見に出かけたのは、七夕の二星のように逢会の叶わない間柄になっ

たからではある。けだし「垣間見」こそは王朝物語における男女邂逅のとりわけ重要な設定であった。男はひたすら
のぞき見をし、女は常に見られる存在である。慎之助の月見行はそれに終始する。いつも座敷の中には「燭台の灯が
ともつてゐて」「泉水のおもてには月があかるく照つて」いたが、お遊さんの顔かたちは「生憎とすゝきや萩のいけ
てあるかげ」に隠れて見えなかった。この見え難さはお遊さんとの隔絶をも意味する。

お遊さんの暮らしは腰元に傳かれるお姫さまかお局さまのようだった。琴三味線、部屋の調度類、着物、食事、た
ばこ、起居、物見遊山。聞香もんこうや投扇興や碁のような「あそびの中にも風流がなければあきませぬ」。そのような趣味
が父の大名趣味・御殿風好みと一致した。お静と違って「生れつき芝居気がそなはつて」いて、「自分でさうと気が
つかないでこゝろに思ふことやしぐさにあらはれることが自づと芝居がゝつてゐてそれがわざとらしくもいやみにも
ならずにお遊さんの人柄に花やかさをそへ潤ほひをつけてゐた」。「襦袢を着て琴をひいたり小袖幕のかげにすわつて
腰元に酌をさせながら塗りさかづきで酒をのむやうな芸当はお遊さんでなかったら板につかないのでござりました」。

お遊さんが遊女の「まぼろし」の投影であることはすでに指摘がある。対岸に橋本の遊廓を眺めて、「わたし」は
琵琶行を吟じ江口・神崎の遊女のことを思った。「さだめしちひさな葦分け舟をあやつりながらこゝらあたりを徘徊
した遊女も少くなかつたであらう」。そうした「女どものすがたをふたゝび此の流れのうへにしばしうたかたの結ば
れるが如く浮かべることが出来ないであらうか」。そのうたかたがお遊さんである。「江口」の遊女は光の中に生身の
普賢菩薩と現われたが、お遊さんも明るい月光の下に拝跪すべき美しい女菩薩であった。

これもすでに指摘があるように、谷崎が引用した「見遊女序」の作者は大江匡衡ではなく大江以言が正しい。小説
には「おぼろげな記憶」に頼ったとあるが、次に引く大江匡房の「遊女記」の末尾の「江翰林」（以言）を匡衡と誤
認したためだろうか。匡衡（九五二〜一〇一二）は正四位下文章博士式部大輔、以言（九五五〜一〇一〇）は従四位
下文章博士式部権大輔なので、確かに紛らわしい。あるいは、「遊女記」中に長元・延年年中の遊女たちのことを記

し、それらが『栄花物語』中の記事と対応するので、その作者である赤染衛門の夫匡衡と混同したのかもしれない。なお『古事類苑』人部には「見遊女序」（本朝文粹卷九）と「遊女記」（朝野群載）の一節を並べ載せるが、谷崎は『群書類従』等の刊本をも参照したらしく、引用の訓読文は全同ではない。また西行の『撰集抄』は安田保雄氏の指摘のように「新型名著文庫」に拠ったかと思われるが、引用文にはわずかな誤脱がある。『増鏡』の場合も流布本文に拠ったらしいが、どの印行本との間にも小異がある。早く明治四十一年「学友会雑誌」に発表した「増鏡」に見えたる後鳥羽院」（全集第二十四卷）には、「蘆刈」に引用したのと同じ文章が引かれている。「蘆刈」に引く三箇条中の二箇条であるが、引用はやはり流布本に拠ったらしい。因みに『本朝文粹』の卷八には匡衡らの八月十五夜の詩序七篇が収められている。谷崎はこれをも目にしただろう。

しかしお遊さんは中世の遊女であるよりも、容貌・音曲・芸事・教養・娯楽・衣裳・食事・遊戯・使用人等の点でむしろ江戸期の上格の遊女に近い。「古い泉蔵人形の顔をながめてをりますときに浮かんでまゐりますやうな、晴れやかでありながら古典のにはひのするかんじ」も、造形は近世的と言ってよい。

そう言えば、近世の遊里では八月十五夜の月見は特に賑やかな年中行事であった。お遊さんが月見の夜にしか姿を見せず、父の回想談がほとんど室内に限られていることも暗示的である。「襦袢を着せて、几帳のかげにでもすわらせて、源氏でも読ませておいたらば似つかはしいだらうといふやうな人」とは日本的古典的ではあるが、どこか近世後期の上格の遊女を思わせる。「田舎源氏の絵にあるやうな世界」も同様である。源氏絵は明治初年まで大いに流行した。琴のおさらいの日に着た襦袢は特に変わった衣装ではないが、かつては武家女性の礼装であり、遊女の盛装でもあった。嘉永六年（一八五三）の『守貞謾稿』卷十八に、諸国の官許の遊女は打掛を礼晴に用い、廊中の往来に着用し、京島原大坂新町の太夫職・天神職と称する上妓は必ず掛を着るとある。「次の間との襖さかひに衝立がはりの衣桁がたてゝありましてそれへ日によつていろゝな小袖がかけてある」「お遊さんはその奥の方に上段の間こそあ

りませぬけれども脇息にもたれてすわつてゐる」というのも座敷持ちや部屋持ちの遊女に似る。「ひまなときには伏籠をおいて着物に伽羅をたきしめたり」とあるが、伽羅香は江戸期の遊里で特に珍重され、遊女が身に代えても欲しがるほど希少・高価なものだった（『色道大鏡』『嬉遊笑覧』）。谷崎もかつて多佳女にまつわって、大友だいともの家中に籠る伽羅のなまめかしい薫りや着物に焚きしめてある匂いに大いに魅力を感じたことがあった（『青春物語』京阪流連時代のこと）。

聞香は組香の遊戯のことで、江戸期には源氏香が親しまれた。王朝の薫物合や中世の名香合の伝統を引き、『源氏物語』の巻名に拠った香図が作られた。また投扇興は安永年間に起こり、文政・嘉永年中にも京坂江戸で盛行した。点の名がやはり『源氏』の巻名に因んでつけられた（『嬉遊笑覧』『守貞謾稿』『古事類苑』遊戯部）。その遊具は明治以後も作られたらしい（『日本の美術』三三一号「遊戯具」一九六八年）。

勿論お遊さんは「遊女」ではないが、また家庭生活者たる妻女らしくもない。慎之助が心ひかれたのは髪をおすべらかしにして櫛櫛を着て琴を弾く姿だった。粥川家へは器量望みで貰われて「我がまゝにのんびりと」暮らし、若後家になってからも贅沢に物見遊山に出かける「気楽な境涯」の御寮人だった。芝居見物、吉野の花見、伊勢や琴平参りなど遊樂の記事ばかりが多い。慎之助にいたずらをして息をこらえさせたり、こそばゆがらせたり、居眠りしたところを起こしたり、その人柄の魅力はいつも遊びの中に現われる。「お父さん、あの人たちはお月見をして遊んでゐるんですね」。再縁の話も、「巨椋の池に別荘があるのを建て増してお遊さんの気に入るやうな数寄屋普請をして住まはせる、それはく〜ていちようにして粥川にゐるときよりもつと大名式に暮らせるやうにしてあげるとけつこうづくめの話でござりました」。お遊さんは普通の女のように「恋に死ぬ」方を選ばなかった。御殿の「きらびやかな襖や屏風のおくふかいあたり」に住み、栄耀栄華の「金にあかしたくらし」をして「床の間の置き物のやうにしてかざつておくにかぎる」と言われた女である。昔と同じように今でも「お遊さんが琴をひいて腰元に舞ひをまはせてゐる

のでござります」。その『遊女性』は明らかであろう。微緑零落した慎之助が望める女性では到底なかったのである。男の語りの時点ではお遊さんは現実の存在ではない。巨椋池の別荘も月見の宴もはや過去の幻である。男の影が「いつのまにか月のひかりに溶け入るやうにきえてしまった」ように、お遊さんの艶姿も十五夜の一夜のみの美しい幻である。永遠に年をとらず、あえかに花やかに満月の光のように輝く生命である。

思えば「蘆刈」は奇妙な小説である。「ちやうどその日は十五夜にあたつてゐたので」と偶然を装いつつ、始めの水無瀬の散策から逸脱して、実は月見の夜にまつわる男女の不思議な物語を聞くとというのが意外な眼目だったのである。その語りの、位高く美しい女性ゆえに男が妻と契りを結ばず、後に十五夜に子供を連れて覗き見に行くというのも、やはり尋常な行為ではない。王朝物語の垣間見ならいざ知らず、月に浮かれてさまよい歩く奇行の類である。その女は心の中で男を慕いながら妹と結婚させ、自ら男と近づきになって「ふしぎな恋」を続けようとしたとも思われる。乳を飲ませたりいたずらをしたり、遊び相手としては楽しい女であったが、しかし男と一緒にいる気持ちが心底あったのかどうか疑わしい。これを『遊女』と呼ぶならば、男にしてみれば、一度思い切った後に妻が亡くなり、また一目見たさに遊里に通うようなものである。再縁した女は夫にも愛されず、贅沢に遊び暮らして生涯を送る。「昔、そこにはありと聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女のあたりを思ひける——目には見て手には取られぬ月のうちの桂のごとき君にぞありける」(『伊勢物語』七三段)。即ち、ついに手の届かなかった幻の佳人への男の悲しい恋のころ、それが「蘆刈」一篇の最も幽艶哀切なる主題なのであろう。

注

(1) 父の願望として、あるいは作品の比喩的な意味においてはお遊さんは「妻」であったと言ってもよい。男の母がお静であることは動かないが、父の「わすれずにゐておくれよ」「おぼえておいてもらひたい」との願いは、男にとってお遊さんが終生

“生まぬ母” “象徴としての母” であったことを意味する。

(2) すでに安田保雄氏「『蘆刈』の世界―谷崎潤一郎と古典―」(『比較文学論考 続篇』一九七四年)に指摘がある。

(3) 槇島は『山城名勝志』に「在宇治橋西北十町余三元島也」とある(新修京都叢書第十四卷)。現在の宇治市槇島町。西園寺公経の真木島山荘があった(『百鍊抄』)。西園寺家の栄華は『増鏡』巻五以下に述べられる。宝治の行幸のことは『宇治御幸記』(続群書類従第四輯上)に詳しい。

(4) 『宇治川兩岸一覽』に、月見岡が秀吉の月見台のあった所とする。その他明治二十八年刊の『京華要誌』(新撰京都叢書第三卷)など、諸書に見える。

(5) 伏見から真木の釣月へは槇島堤を通じる。『宇治川兩岸一覽』によれば、豊後橋から宇治橋まで約五十町。『大日本地名辞書』も同説である。釣月庵の故地は今の釣月山誓澄寺と伝える(『宇治市史』第二卷)。なお『新千載集』に西園寺実氏(公経の子)の真木島の月の歌があり、『巨椋池干拓誌』所収の西田直二郎「歴史・文学に現われたる巨椋池」にも巨椋池の名月の歌を引く。

(6) 塩崎文雄氏「『蘆刈』余影」(日本文学一九九二年十二月)に詳しい年代考証がある。

(7) 参考までに記せば伏見の酒造業は日清・日露の戦争の間に急成長を遂げたという。お遊さんが再縁した「伏見の造り酒屋の主人」もこの頃羽振りが良かったものと思われる。伏見は「伏水」である。因みに言う、粥川、芹橋、宮津という姓は全て水に関係する。小曾部は水無瀬川の源に近い旧邑古曾部の地名から取ったものだろうか(現在大阪府高槻市内)。

付記。和辻哲郎に「巨椋池の蓮」という随筆がある。昭和二十五年(一九五〇)、「二十何年前」の夜明けに見た巨椋池の蓮の花の美しさを回想した小品である。和辻が京都に住んだのは大正十四年から昭和九年までであるが、書簡や年譜などから推考すると大正末年のことと思われる。巨椋池の蓮見物は江戸期に始まり、大正期から昭和初期にかけても、八月の花の頃には蓮見舟が一日に何十隻も出るほどのにぎわいだったという(福田栄治氏「旧巨椋池漁村の生活習俗―久世郡久御山町東一口の場合―」京都府立総合資料館紀要第十号、一九八一年八月)。薄明の蓮の花と、月見の夜の「蘆刈」という違いはあるが、和辻と谷崎との不思議な交錯点のように思われて興味深い。

(一九九八年三月十三日)